タイトル：2021 年度研究セミナー（第 22 回）
日時：2021 年 12 月 17 日（金）～18 日（土）
オンライン開催

「私の博士論文」
細田和江（AA 研）

2016 年度から「傍観者」として研究セミナーに参加していた私に「私の博士論文」での報告の打診が来た。その時の正直な気持ちは「やっぱり来たか、でも気が重いなあ」であったが、これまでの研究生活を「反面教師」としてこれから博論を執筆する面々に何か一つでも役に立てば、と引き受けた。

私は 2012 年度に博士論文『イスラエルにおける「多様性」の位相：ネーション・言語・文学を通して見るイスラエル社会』（中央大学）を提出した。博論提出までにかなりの期間（13 年）を要したため、執筆過程や方法論について語っても説得力に欠けると考え、今回はいかにテーマ設定に苦慮し、諦めかけたか、という内容に終始した。そのため、大学院の選定からテーマ設定の見通しの甘さ、留学中の脱線、留学後の生活資金不足、体調の不良など、研究内容よりも長期にわたる執筆期間における研究生活の維持に関することが話の中心となり、大幅に脱線してしまった。研究セミナーに参加する受講生は順調に研究生活や実績を積んでおり、計画的に博論を執筆している。こうした受講生にとって、私の報告には有益な情報が果たしてあったのか甚だ疑問ではあるが、別の次元の「リアル」な経験談としては受け入れられたようである。

上記のような「失敗」エピソードだけで大幅に時間を超過してしまったため、最後は駆け足になってしまったが、あまり「うまくいかなった」博論執筆者として自分のことは棚に上げ、最初に閃いた直感を大切にすること、博論自体に時間をかけ過ぎず、提出してから軌道修正すること、博論での議論の持ち越しからその後の研究生活がスタートすること、博論は早いうちに書籍化すること、「よそ見」を恐れないことなど、いくつかアドバイスをした。そういった意味では私の報告は博論執筆へというより、博論後の研究生活へのアドバイスであったのかもしれない。

受講生からは、やめようと思った時にやめなかった理由や、生活基盤の維持に関する質問があった。こうしたいくつかの質問からは受講生の「不安」が垣間見えた。これまで順調に研究を積み上げて来た受講生が「自分だけが不安なのではないのだ」と気づき、それを他人と共有できたことは、私の報告の唯一の成果であったのではないだろうか。

今回の受講生も数年後には講師として「私の博士論文」を語るようになるかもしれない。そうした時により良いアドバイスができることを心から願っている。